

A Study of *Flowers* used in The Picture of Dorian Gray by Oscar Wilde

ドリアン・グレイの肖像に用いられた花についての一考察

三 嶋 君 夫
Kimio MISHIMA

序

先稿, A Study of COLOUR used in Fairly Tales by Oscar Wilde (大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」昭和61年4月発行)ではワイルドの Fairly Tales 中の色彩について考察した。それによると,特に,金(黄),銀(白)という光に相当する色彩を多用することによって,彼自身は持ち前のキリスト教的精神を存分に童話の中に注入し,見事な童話の世界を展開していたことが判明した。1884年の第一童話集, *The Happy Prince and Other Tales* の中に *The Nightingale and the Rose* という物語がある。Nightingale が,1本の赤いバラの花を欲する学生のために自分の命を捨てて赤いバラの花を咲かせるというプロットである。満月の日にバラの木の棘に心臓を突きさして自分の血で赤いバラを開花させるのであるが,冷たい女神のような月の白さと赤く染まっていくバラの花のコントラストが見事である。そして冷やかな月に向かって歌う Nightingale の姿は,まさしく *The Canterville Ghost* の中の次の文を想起させる。

Love is always with you, and Love is stronger than Death is.⁽¹⁾

富士川義之氏は,「世紀末の美と夢3 (イギリス) 美神と殉教者」の中で,ウォルター・ペイターの考え方に触れて,『死の意識によって活気づいた美への欲求⁽²⁾』という表現をしているが,まさに Nightingale は死を意識することで生に超越的意義を見いだしたものと考えられる。

またワイルドが, Nightingale と Rose という組み合わせを考えたことに言及してみたい。加藤憲市氏は,その著「英米文学植物民俗誌」の中で次のように述べている。『ペルシャで, rose を手折ればナイチンゲールが鳴くというのは,この花の赤い色はこの鳥の血で染まっているからだ⁽³⁾という。』また加藤さだ氏は,その著「英文学植物考」の中で『これは

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」第7号（1987年）

自分の血で赤く染めたばらに歌うナイチンゲールというペルシャの伝説に基づくとい⁽⁴⁾う。』と記している。ワイルドが学生時代からヘレニズム文化に傾倒していたことを考えあわせると、この物語はペルシャの伝説から題材を得たものと推断できる。また Rose に関連して rose water という句も第二童話集に登場する。これもペルシャ文学の中に王 (Shah) に献上する貴重なバラ香水 (attar) とあるように⁽⁵⁾、それにちなんだものであろう。更に rose water は本稿で取り扱う *The Picture of Dorian Gray* 第十九章の冒頭の部分にも登場する。

ヘンリー卿が、バラ香水の中に細長く白い指を浸しながら言う科白、

‘There is no use your telling me that you are going to be good,’ cried Lord Henry, dipping his white fingers into a red copper bowl filled with rose-water. ‘You’re quite perfect. Pray, don’t change.’⁽⁶⁾

の貴重な背景になっている。

次に1891年に出版された第二童話集 *The House of Pomegranates* について言及したい。題名に Pomegranate という夏の日に燃える火のような赤い花の名がついている。富士川義之氏の表現を借りれば、これは、ワイルドの美に対する欲求の肥大化とも考えられ⁽⁷⁾るが、英国芸術のルネサンスを目差すワイルドにとって、Pomegranate は既成道徳を混乱させ、暗闇の英国を覚醒させるに十分な情熱の真紅の花なのである。Pomegranate の花言葉は foolishness⁽⁸⁾ であり、fertility, wealth の象徴である⁽⁹⁾ことを考えあわせると Paradox を得意とするワイルドが、このようなタイトルをつけたのは意図的であったと想定できる。また彼は、自分の詩 LA BELLA DONNA DELLA MIA MENTE⁽¹⁰⁾ の中の一節でも次のように官能的に Pomegranate を用いている。

As a pomegranate, cut in twain,
White-seeded, is her crimson mouth,
Her cheeks are as the fading stain
Where the peach reddens to the south.⁽¹¹⁾

更に *The Birthday of the Infanta* の舞台がスペインの宮廷であり、スペインの国花が Pomegranate であることもつけ加えておきたい。

ワイルドが新しい唯美主義の象徴として、Sunflower をいつも胸にさして歩いたように、この Pomegranate は心の中で焰のように燃えていたに違いない。

このように二つの童話集を調べると、Rose や Pomegranate に象徴されるように、か

A Study of *Flowers* used in *The Picture of Dorian Gray* by Oscar Wilde

なり意識的な花の使い方が見うけられ、ワイルドの童話のかなり重要な要素となっている。また彼の童話には *Rose*, *Pomegranate* 以外にも次のような花が登場する。

almond; anemone; bulrush; clove-pink; columbine; cowslip; daffodil; damask Rose; Fair-maids of France; Flower-de-luce; Gilly-flower; hyacinth-blossom; iris; Ladysmock; lemon; lilac Crocus; lily; Majoram; narcissus; orange; palm-tree; poppy; primrose; Shepherds' purses; Sweet-williams; tulip; violet; wild Basil.

本稿では先稿の関連において、ワイルドの唯一の長編小説である *The Picture of Dorian Gray* の中で用いられている花及びその関係を調査し、ワイルドが、いかに象徴的に、それらを使って物語に効果を与えたかを考察してみようとするものである。

本文(I)

those primary conditions of receptive expectation which so often precede the presentation of psychical phenomena.⁽¹²⁾

上記引用文のように心霊現象の出現の前に、それを予期して受け入れようとする気持ちが起こることがある。まさしくこれから考察していこうとする作品 *The Picture of Dorian Gray* の第一章の冒頭は、まさにこれから起ころうとする現象を間接的に暗示しているようである。それは甘美な囁きにも似た危険で妖しいムードを漂わせる。

The studio was filled with the rich odour of roses, and when the light summer wind stirred amidst the trees of the garden, there came through the open door the heavy scent of the lilac, or the more delicate perfume of the pink-flowering thorn.⁽¹³⁾

美の使者とも言われていたワイルドは、唯美主義の香りを漂わせた交響楽のプレリュードをライラックの淀んだ香りでスタートさせるのである。この薄紫色の花は、以下、次のような順序で登場する。

The wind shook some blossoms from the trees, and the heavy *lilac-blossoms*, with their clustering stars, moved to and fro in the languid air.⁽¹⁴⁾

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」第7号（1987年）

Lord Henry went out to the garden, and found Dorian Gray burying his face in the great cool *lilac-blossoms*, feverishly drinking in their perfume as if it had been wine.⁽¹⁵⁾

He was bare-headed, and the *leaves* had tossed his rebellious curls and tangled all their gilded threads.⁽¹⁶⁾

Dorian Gray listened, open-eyed and wondering. The spray of *lilac* fell from his hand upon the gravel.⁽¹⁷⁾

‘Certainly. The Park is quite lovely now. I don’t think there have been such *lilacs* since the year I met you.’⁽¹⁸⁾

画家バジルはヘンリー卿に自分が描いたドリアンの肖像画をひとの眼にさらしたくない理由を告げようとする。それは自分の魂の秘密をその肖像画に表わしてしまったということなのであるが、ヘンリー卿がその秘密について画家バジルから詳しく聞きだそうとする時、重たげなライラックの花が物憂い空気の動きにつれて左右に揺れるのである。この時、ヘンリー卿はまだドリアン・グレイに会ってはいなかったが、彼は叔母のアガサ夫人からドリアンのことを非常に真面目で美しい性質の持主でイーストエンド貧民窟救済事業を助けてくれる素晴らしい青年であると聞いていた。その青年の名がドリアン・グレイだったのである。ヘンリー卿は次のように想像していた。

I at once pictured to myself a creature with spectacles and lank hair, horribly freckled, and tramping about on huge feet.⁽¹⁹⁾

画家バジルはヘンリー卿のドリアンに対する悪影響を懸念するが、やがて二人はドリアンに遭遇するのである。ヘンリー卿は一日見るなり次のように直感した。

There was something in his face that made one trust him at once. All the candour of youth was there, as well as all youth’s passionate purity. One felt that he had kept himself unspotted from the world.⁽²⁰⁾

俗世間の汚濁を一点も身に受けずにきた人間のように思えたのである。ヘンリー卿の現実ばなれのしたオリーブ色の顔、そのやつれた表情、低く物憂げな声、冷たく白い花のよ

A Study of *Flowers* used in *The Picture of Dorian Gray* by Oscar Wilde

うな手、そしてその手は彼がものを言うにつけ音楽のように流れ動き、彼の発する言葉を助長しているのである。またそれは唯美主義の甘美な調べを奏でながらドリアンの脳裏深くくい込み、頭脳を混乱させていくのである。ドリアンは、この逆説の多い言葉に妙に震動を感ぜざるを得ない。そして彼の人生は、突然、焰のような色彩を帯びるようになる。

Life suddenly became fiery-coloured to him. It seemed to him that he had been walking in fire. ⁽²¹⁾

ドリアン・グレイは大きな冷たいライラックの花の中に顔を埋めずめる。そしてワインでも飲むかのようにライラックの香りを夢中に吸い込むのである。ヘンリー卿はさらに言葉が続けた。

'Nothing can cure the soul but the senses, just as nothing can cure the senses but the soul.' ⁽²²⁾

ライラックの葉は、花の中に顔まで埋めずめ、感覚によって魂を癒すべく夢中になってライラックの香りを吸いこんだドリアンの髪の毛をかき乱し、黄金の糸をもつれさせる。最初に淀んだ香りを運んできた薄紫色の花はドリアンの睡りをすっかり醒ましてしまった。まさに、ライラックの香りは、唯美主義の象徴であり、しかも唯美主義者ヘンリーに示唆されたドリアンは、次第にナルシズム的空想に取り憑かれる。

And Beauty is a form of Genius-is higher, indeed, than Genius, as it needs no explanation. It is of the great facts of the world, like sunlight, or spring-time, or the reflection in dark waters of that silver shell we call the moon. It cannot be questioned. It has its divine right of sovereignty. It makes princes of those who have it. ⁽²³⁾

Live! Live the wonderful life that is in you! Let nothing be lost upon you. Be always searching for new sensations. Be afraid of nothing.....A new Hedonism-that is what our century wants. You might be its visible symbol. With your personality there is nothing you could not do. ⁽²⁴⁾

ヘンリー卿の言葉はとどまるところを知らない洪水のように、ドリアンの心の中に流れ込んでいった。人間の持つ若さ、永遠の美、歓喜の叫び、これらが衰えゆく寂しさを思う

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」第7号(1987年)

と醜悪さと悲劇性ゆえに、冷たい戦慄が走るのである。真の人生、充実した人生とは‘Youth’なのだとまで考えるに至ったドリアンは、握りしめていたライラックの小枝を思わず砂利の上に落としてしまう。言いあらわしようのない新しい感情がドリアンの心を支配していった。やがてドリアンは自分の肖像画と対面する。それは歓喜の瞬間であった。これまで一度も感じたことのない気持ちに驚異の念を抱いて彼は立ちすくんでいた。自分はこのにも美しいものかという気持ちが彼の全身を包んでいくのと同様にヘンリー卿の言葉の意味がいま実感となってドリアンを恐ろ。そして彼は「自分のかわりに年老いていくのが、この肖像画であれば、どんな代償も惜しまない……」と呟いた。

‘How sad it is! I shall grow old, and horrible, and dreadful. But this picture will remain always young. It will never be older than this particular day of June…… If it were only the other way! If it were I who was to be always young, and the picture that was to grow old! For that-for that-I would give everything! Yes, there is nothing in the whole world I would not give! I would give my soul for that!’⁽²⁵⁾

しかし、ドリアンは、この言葉の意味がどういう結果をもたらすのか知る由もなかった。ヘンリー卿とドリアンが出て行こうとした時、バジル・ホールウォードは絵のところに歩いて行き気になることを呟く。

それはまさに絵の中に自分の魂を注ぎ込んだ画家の真実の発言であった。

‘I shall stay with the real Dorian,’he said, sadly.⁽²⁶⁾

画家バジルが自分の中にある魅力的なるものを全て作品に注いでいくのと同様に、ヘンリー卿は言葉という媒介を通してドリアンという芸術作品を完成させていこうとするのである。ドリアンがシビルを愛した時も、ヘンリー卿はバジルが感じたほどの苦痛を味わいはしなかった。むしろ自分の発した言葉によって、ドリアン・グレイの魂が一人の少女の前にぬかづくようになったことを楽しんでいるかのようであった。それは次の表情に表われている。

He was conscious-and the thought brought a gleam of pleasure into his brown agate eyes-that it was through certain words of his, musical words said with musical utterance, that Dorian Gray’s soul had turned to this white girl and bowed in worship before her.⁽²⁷⁾

A Study of *Flowers* used in The Picture of Dorian Gray by Oscar Wilde

これ以後、しばらくライラックの花はプロットから影をひそめる。ヘンリー卿がバジル・ホールウォードのアトリエで始めてドリアンに会った時、ライラックの淀んだ香りはあたりをたちこめていた。そしてそれは、はにかみ屋の控えめな少年であったドリアンを誘惑する悪の匂いであった。悪なるがゆえに美しく、その美しさでもって人々を迷わすライラックの香りは、ドリアンの魂を癒し彼の性質を草花のように開花させたのである。そしてその新しい感性を持ってドリアンは恋をする。これ以後、10年を経過するまでライラックはその姿を隠蔽する。10年後、ヘンリー卿は、ハイドパークに咲くライラックの見事さに驚嘆の感を抱くのであるが、ちょうどそれはドリアンがもとの穢れを知らぬ純真なばらのように白い少年時代に戻りたいという激しい渴望をいただいた時期であった。この10年の月日の間にドリアンは二つの大きな罪の意識にさいなまれていた。一つはシビルの自殺であり、もう一つは画家バジルを殺害したことであった。感覚によって魂を癒すために恐怖の魔窟へ行きアヘンを吸ったり、一冊の黄色い本を熱読したり、猟に行つて忘れようとしたが全ては無駄であった。ドリアンが自分の肖像画を見ると、実際のドリアンの顔は永遠の若さを保っているにもかかわらず、肖像画の顔は醜悪となり、グロテスクなぶざまな影を落としていた。肖像画の手についた真紅の血痕は、以前にもまして鮮やかさを増し、したたるばかりの血の鮮烈さがドリアンを恐怖の底に落としていった。ドリアンは善行を行なおうと決意する。そしてシビルによく似たヘッティという一人の少女を愛するようになるが、同じ花のような姿のままにしておこうと駆落ちすることをやめにする。しかしヘンリー卿はそのささいな自己犠牲が罪悪だとドリアンに告げるのである。そして肖像画もドリアンの善行に対して何の変化も示さなかった。まるで背徳性を刻々反映する倫理的な鏡のようであり不快な歪みは増々、醜悪さを増すのである。自分は善行により変わったと主張するドリアンにヘンリー卿は次のように述べる。

‘Yes: you are the same. I wonder what the rest of your life will be. Don’t spoil it by renunciations. At present you are a perfect type. Don’t make yourself incomplete. You are quite flawless now. You need not shake your head: you know you are.’⁽²⁹⁾

ヘンリー卿はこの頃にハイドパークで咲き誇るライラックを見るのである。すなわちヘンリー卿にとってライラックの開花はドリアンの永遠の若さの象徴のように考えられる。立野正裕氏は「ユリイカ（青土社、1980年9月1日発行）」の中で、ヘンリー卿の考えに触れて『ヘンリーのいう「永遠の美と若さ」とは、なによりも、外界と内界の両方に関わる統合的な感受性を絶えず刷新し深化拡大してゆく過程を意味するにほかならない』と述べている。その意味では、ヘンリー卿にとってライラックが見事に咲き誇ったと感じ

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」第7号（1987年）

たのは、彼がドリアンの自己を変革し、永遠の美と若さを保持させたと思った自己満足であろうと推定できる。それに比べてドリアンは若く美しい外貌とはうらはらに自分の内面のおぞましさを如実に見るのであるから、ライラックの見事な開花の時期に、ばらのように白い少年時代に戻りたいと感じたのは、当然の成り行きのように見える。それにしても、ライラックに始まりライラックの見事な開花で終焉の予告をしているのは、何とも因縁めいたものを感じずにはおれない。

またワイルドがこの作品の中で取り扱った花あるいは花に準ずるものは次のようなものがある。

acanthus-leaves; apple; apple-blossoms; apricot; asphodel; carnations; cherries; clematis; convolunlus; dahlia; daisy; pink-petalled daisy; white daisies; flowers; frangipanni; hill-flowers; purple-lipped irises; yellow jonquils; Jasmine; laburnum; honey-coloured blossoms of a laburnum; lilac; lilacs; lilac blossoms; lilac blanc; white lily; water-lilies; lilies; lotus-blossoms; lotus-covered Nile; fleurs de lys; white narcissus; orange; orchid; orchids; orris-root; pine-apple; golden pomegranates; The Street of Pomegranates; dotted pomegranates; poppies; rose; pale rose; roses; red roses; faded roses; yellow and red roses; red and white roses; sulphun-yellow roses; gold roses; white and damask roses; strawberries; pink-flowering thorn; stripped tulips; tulips; parrot-tulips; vegetables; violets; Parma Violets; woodbine.

このように非常に多くの花や植物が作品の中に表われる。そしてそれらはライラックに代表されるようにいろいろな形で登場人物にかかわりを持ち、少なからぬ影響を与えている。代表的なものを取りあげてその花の特性、象徴性を調べながら作品にどのようなかかわりを持つか考察を進めることにする。

本文(Ⅱ)

ワイルドが *The Picture of Dorian Gray* の中に用いている花は35種類あるが、本文(Ⅰ)に引用しているように、単数、複数、または同種類であるが色の違う花などを考慮すると約60種類にも及ぶ。まるで *The Picture of Dorian Gray* は19世紀末の花園である。ここでは、アルファベット順に考察を進めることにする。

a) **asphodel, yellow jonquils, white narcissus**

作品の中には、次のような順で登場する。

A Study of *Flowers* used in *The Picture of Dorian Gray* by Oscar Wilde

It seemed to me that all my life had been narrowed to one perfect point of rose-coloured joy. She trembled all over, and shook like a *white narcissus*.⁶¹⁾
I had buried my romance in a bed of *asphodel*.⁶²⁾

Summer followed summer, and the *yellow jonquils* bloomed and died many times, and nights of horror repeated the story of their shame, but he was unchanged.⁶³⁾

ドリアンはシビルについて純白の *narcissus* のように揺れていたと表現しているが、ワイルドはこの言葉の背景に、『水面に映る自分の姿に見とれて思わず身をのり出し、水中に落ちて死んだ美少年がこの花と化したという』⁶⁴⁾ 伝説を意識していたと想定できる。また *asphodel* については、ギリシャ神話では極楽に咲く不死の花という意味でヘンリー卿の科白に一致しているように思える。*jonquil* は黄ずいせんの意味で、その花言葉は、I desire a return of affection (愛情のお返しがほしい)⁶⁵⁾ であり、シビルに対する愛情が *jonquil* という言葉の背景にあるように推定できる。

b) **dahlia**

ドリアンが自分の恋人シビルをヘンリー卿やバジルに紹介するために連れていった劇場の中を表わす場面に *dahlia* が使われている。

The heat was terribly oppressive, and the huge sunlight flamed like a monstrous *dahlia* with petals of yellow fire.⁶⁶⁾

大きな太陽光が黄色い焰の花卉をつけた巨大なダリアのように輝いていた。と記されているが、雑踏する場末の街路にあるキラキラした劇場の雰囲気は *dahlia* という言葉によってとてもリアルに感じられる。

c) **Daisy**

The sunlight slipped over the polished leaves. In the grass, *white daisies* were tremulous.⁶⁷⁾

Lord Henry smiled, and, leaning down, plucked a *pink-petalled daisy* from the grass, and examined it.⁶⁸⁾

‘Yes, she is a peacock in everything but beauty,’ said Lord Henry, pulling

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」第7号（1987年）

the *daisy* to bits with his long, nervous fingers.⁽³⁹⁾

‘Laughter is not at all a bad beginning for a friendship, and it is far the best ending for one,’ said the young lord, plucking another *daisy*.⁽⁴⁰⁾

On a tiny satinwood table stood a statuette by Clodion, and beside it lay a copy of *Les Cent Nouvelles*, bound for Margaret of Valois by Clovis Eve, and powdered with the *gilt daisies* that Queen had selected for her device.⁽⁴¹⁾

このように純白の雛菊，ピンクの花弁をつけた雛菊，金色の雛菊など，非常に色どり豊かな雛菊が表われる。第一章に出てくる雛菊は庭に咲いているものであるからおそらくイギリスの野生の花の一種であろうと推定される。しかもイギリスでは冬を除いて陽が射すときに咲くものであるがゆえに，たいへん古くから親しまれている。それだけに第一章の淀んだ重苦しい退廃的雰囲気の中であって小さなさわやかさを与えてくれる。しかし何か危険で妖しいイメージがつきまとうヘンリー卿が，バジルと話をする時，よく雛菊にさわったり，花弁をひっぱるが，そのヘンリー卿の妖花のイメージは，小さなさわやかな雛菊に比して，とても対照的である。ちなみに Daisy の花言葉が *innocence*⁽⁴²⁾ であるということも付加しておこう。

d) *iris* (*fleur de lys*)

‘Ah! but what do you mean by good?’ cried Basil Hallward.

‘Yes,’ echoed Dorian, leaning back in his chair, and looking at Lord Henry over the heavy clusters of *purple-lipped irises* that stood in the centre of the table, ‘what do you mean by good, Harry?’⁽⁴³⁾

ドリアン，ヘンリー卿，そしてバジルの三人が善良というものに対する議論を展開している。ドリアンは机上の紫のアイリスごしにヘンリー卿を見すえている。アイリスがギリシャ語で虹を疑人化した言葉であるとするならば，第十七章で七つの大罪を口にするヘンリー卿をアイリスが啓示しているように推定できる。また *fleur de lys* はいづれもこの作品の中に次のような形で登場する。

books bound in tawny satins or fair blue silks, and wrought with *fleurs de lys*, birds and images;⁽⁴⁵⁾

A Study of *Flowers* used in *The Picture of Dorian Gray* by Oscar Wilde

dalmatics of white satin and pink silk damask, decorated with tulips and dolphins and *fleurs de lys*;⁽⁴⁶⁾

また *fleur de lys* はフランス王室の紋章になっている花のことでもあり、花言葉は flame, aristocracy⁽⁴⁷⁾ である。

e) *lily*

Her body swayed, while she danced, as a plant sways in the water. The curves of her throat were the curves of a *white lily*. Her hands seemed to be made of cool ivory.⁽⁴⁸⁾

Huge carts filled with nodding *lilies* rumbled slowly down the polished empty street. The air was heavy with the perfume of the flowers, and their beauty seemed to bring him an anodyne for his pain.⁽⁴⁹⁾

シビルの揺れ動くさまは、水中の草花のようであり、咽喉の線は、白百合の曲線のようである。そして彼女の発った言葉は、歓喜の表情のみられない態度と相乗効果をくり返し、ドリアンの気持ちを愕然とさせる。ドリアンは芸術性をなくしたシビルに全く魅力を感じなくなり、自分の冷めた気持ちをまぎらわすかのように街路をさ迷う。コヴェントガーデン近くで見た大きな荷車に積まれた百合が、揺れるたびに首を振っているさまは、まるで優雅なシビルのようである。百合からでる香り高い、夏の空気を甘く包む香りが、かえってドリアンの心をむせかえすような臭気として漂う。百合の美しさのみ苦痛を鎮静⁽⁵⁰⁾しようと努力するが無駄である。ちなみに *lily* の花言葉は *purity and sweetness* である

f) *orchid*

ビクトリア女王の時代は蘭栽培流行の絶頂期であり、裕福な人々の間で趣味として広が⁽⁵¹⁾っていった。この小説 *The Picture of Dorian Gray* の中では次のように登場する。

There were in it metaphors as monstrous as *orchids*, and as subtle in colour.⁽⁵²⁾

‘Yes-Harden. You must go down to Richmond at once, see Harden personally, and tell him to send twice as many *orchids* as I ordered, and to have as few white ones as possible. In fact, I don’t want any *white ones*.⁽⁵³⁾

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」第7号（1987年）

ドリアンは、画家バジルを殺害した後、その死体の証拠隠滅を彼の友人、アラン・キャンベルに依頼する。アランがいよいよながら承諾した時、ドリアンは、召使いのフランスに、セルビーに蘭を届けるように頼むのであるが、その時、白いの一本も欲しくないと言う。この科白の背景には、当時のビクトリア社会に対するワイルドの抵抗があるように想定される。彼は、たくさんの色あいの、香りの良いものをドリアンの科白の中で用いたかったのであろう。それは、薬品による死体消却の悪臭を消す効果をも含んでいるからである。あるいは当時の貴重な宝物とされていたうす青い蝶が群れ集まったような青い蘭を登場させたかったのかもしれない。

ワイルドは学生時代に自分の部屋を blue china で装飾したぐらいに blue という色に、執着心を持っている。いずれにしても、どのような花の色か解からないところにこの小説と同様の神秘性が漂うのである。また orchid という語は、公爵夫人と話すヘンリー卿の科白の中にも表われる。

‘My dear Gladys, I would not alter either name for the world. They are both perfect. I was thinking chiefly of flowers. Yesterday I cut an *orchid*, for my buttonhole. It was a marvellous spotted thing, as effective as the seven deadly sins.’⁶⁰

七つの大罪に劣らぬ効果的な花というように、蘭を象徴的に使いながらワイルド独自の芸術論を展開していくのである。

g) Pomegranate

ざくろという言葉は、ワイルドを非常に象徴的に表わしている言葉である。そのイメージに連想される妖しい魅力は、まさに彼の小説のイメージでもある。さて *The Picture of Dorian Gray* の中に表われるざくろの花は、ドリアンが画家バジルを殺害したその翌日、自分の気持ちを鎮静するために開いた本の表紙の模様として登場する。

The binding was of citron-green leather, with a design of gilt trellis-work and *dotted pomegranates*.⁶⁰

またヘンリー卿はドリアンが気に入りそうだと黄色い本を彼に送付する。この本の影響は絶大であった。彼は、醜悪さを増す肖像画と自分の美貌を対比しながらますます魂の墮落に興味を持ちはじめた。そして、人生を最高の芸術としてとらえ可視的な世界に魅かれていく。教会の儀式に関するものにも興味をもち、特に法衣に対して執心していくのである。彼が持っている大法衣には、金色のざくろの模様がついている。

A Study of *Flowers* used in *The Picture of Dorian Gray* by Oscar Wilde

He possessed a gorgeous cope of crimson silk and gold-thread damask, figured with a repeating pattern of *golden pomegranates* set in sixpetalled formal blossoms, beyond which on either side was the pine-apple device wrought in seed-pearls.⁵⁷⁾

そして最後にざくろが登場するのは、ドリアンの生活に多大な影響を及ぼした小説の中である。

.....and then, in a litter of pearl and purple drawn by silver-shod mules been carried through *the Street of Pomegranates* to a House of Gold, and heard men cry on Nero Caesar as he passed by;⁵⁸⁾

この the Street of Pomegranates (ざくろ並木) は、ワイルドの童話 *The Fisherman and the Soul* の中にも表われる。また、ざくろはギリシャ神話では、酒神ディオニュースがゼウスの妃ヘラーに捕えられ、その身を八裂にされた時、彼が流した血が大地に浸みこんで芽生えたとされている。それゆえに燃えるような赤い花が咲くと考えられてきた。ドリアンがバジル殺害直後に開いた本の表紙の赤いざくろは、まさにバジルの血の象徴と思える。

h) **Rose**

ワイルドは *Rose* という語を使う時に、ヨーク家の白バラやランカスター家の紅バラ、あるいはヘンリー二世の愛人であったロザムンドの墓を覆うバラ、ジャコバイトの白バラなどが意識の底にあったのかもしれない。序ですでに述べたように *Rose* と *Nightingale* という、関わりについては、ワイルドは明らかにペルシャ伝説を意識していたことや、今までの花の考察から推定すると一般的なバラではなくて、名前は記していないが優秀なバラの品種を脳裏に描きながら登場人物の中に織り込んでいったと推測できる。あるいは、部屋の生花を毎日、取り替えながら *The Picture of Dorian Gray* を書き上げていったとも考えられる。それは第十七章でヘンリー卿が、自分の胸飾りに、「ロビンソニアーナ」という一輪の優秀な品種の蘭をつけていることや、ワイルドがヘンリー卿の科白を借りて、美しき名を与えることが大切であり、名こそ全てであると考えていることから考察しても、この小説の中に用いられているバラは *Rose* という言葉に代表されてはいるが、多種多様の優秀な品種であろうと思われる。ヘンリー卿の科白は、次の通りである。

‘My dear Gladys, I would not alter either name for the world. They are both perfect. I was thinking chiefly of flowers. Yesterday I cut an orchid,

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」第7号（1987年）

for my buttonhole. It was a marvellous spotted thing, as effective as the seven deadly sins. In a thoughtless moment I asked one of the gardeners what it was called. He told me it was a fine specimen of *Robinsoniana*, or something dreadful of that kind. It is a sad truth, but we have lost the faculty of giving lovely names to things. Name are everything. I never quarrel with actions. My one quarrel is with words. That is the reason I hate vulgar realism in literature. The man who could call a spade a spade should be compelled to use one. It is the only thing he is fit for.¹⁶⁰

また多くのバラが登場する理由の一つとして、シェイクスピアの影響が考えられる。

安部薫氏は、その著「シェイクスピアの花」の中で、『シェイクスピアの作品にもバラは最大の頻度で登場する。数えた人の話では七十回以上現われるそうで、ユリが二十三回、スマイルが十九回なのに比べても、きわめて多いといわなければならない。』⁶¹と述べている。更に安部氏は、前掲書の中で、『シェイクスピアは赤花と白花をとり合わせることによって色彩的な美しさを考案したばかりでなく、香りの面でも、タイテーニアを楽しませる工夫をしている。アルウェンシスの花は香りが高く、かつ夜よく匂うそうだし、エグランタインは葉に芳香があり、とくに雨あがりによい香りがするということだから。』⁶²のように述べ、シェイクスピアが、彼の作品「真夏の夜の夢」で妖精の女王タイテーニアが憩う場所に、いかに工夫をこらしているかを力説している。これらのことを考えあわせると、シェイクスピアの影響を受けたワイルドが小説 *The Picture of Dorian Gray* の中に最大の頻度でバラをとり入れたのも不思議ではない。しかもドリアンの恋人シビルが演ずるのは、ジュリエットでありイモーゲンでありロザリンドなのである。さて *The Picture of Dorian Gray* の中に登場するバラについて考察を進めたい。バラそのもの、すなわち植物として使われているものは、次のようなものがある。なお、順序は本文中の登場順とする。

- a) the rich odour of *rose*.⁶³
- b) the heavy scent of the *roses*.⁶⁴
- c) A long line of boys carrying crates of striped tulips, and of *yellow and red roses*.⁶⁵
- d) The warm air seemed laden with spices. A bee flew in, and buzzed round the blue-dragon bowl that, filled with *sulphur-yellow roses*, stood before him.⁶⁶
- e) Yet the *roses* are not less lovely for all that.⁶⁷
- f) murdered body was covered with *roses* by a harlot who had loved him.⁶⁸
- g) dipping his white fingers into a red copper bowl filled with *rose-water*.⁶⁹

上記引用の中で *sulphur-yellow roses* について言及したい。*sulphur-yellow roses* の花

A Study of *Flowers* used in The Picture of Dorian Gray by Oscar Wilde

の色は白でも紅でも、19世紀末に爆発的に栽培されたピンク色でもない。⁽⁷⁰⁾ イギリス原産でもないように思える。ワイルド自身が創造したものかあるいは、暖かい日射しによって変光して見えているものと想定することができる。シビルに対する罪の意識が、すっかり洗い流されたと思っている朝、ドリアンは肖像画の歪んだ変化も忘れていた。暖かい日和がドリアンの心の平静を保っているが、青い杯と緑黄色のバラ、そしてその周りを飛びまわる蜂の唸りが、前途を暗示しているようである。もしバラの色が変色していたら、肖像画のことを忘れかけたドリアンに、罪の意識を再認させているように推定される。次にバラが色彩的に用いられている例を取りあげて見る。なお順序は、本文中の登場順である。

- a) *rose-red* youth.⁽⁷¹⁾
- b) *rose-white* boyhood.⁽⁷²⁾
- c) Time is jealous of you, and was against your lilies and your *roses*.⁽⁷³⁾
- d) The red candle-shades staining to a *richer rose* the wakening wonder of his face.⁽⁷⁴⁾
- e) lips that were like the *petals of a rose*.⁽⁷⁵⁾
- f) wounds are like *red roses*.⁽⁷⁶⁾
- g) The sky above was like a *faded rose*.⁽⁷⁷⁾
- h) A *rose* shook in her blood, and shadowed her cheeks.⁽⁷⁸⁾
- i) Her hair clustered round her face like dark leaves round a *pale rose*.⁽⁷⁹⁾
- j) All my life had been narrowed to one perfect point of *rose-coloured joy*.⁽⁸⁰⁾
- k) A faint blush, like the shadow of a *rose* in a mirror of silver, came to her cheeks.⁽⁸¹⁾
- l) Its *red and white roses* would die.⁽⁸²⁾
- m) Gold hair, blue eyes, and *rose-red lips*.⁽⁸³⁾
- n) Marco Polo had seen the inhabitants of Zipangu place *rose-coloured pearls* in the mouth of the dead.⁽⁸⁴⁾
- o) A flower was in her right hand, and her left clasped an enamelled collar of *white and damask roses*.⁽⁸⁵⁾
- p) *façade rose*.⁽⁸⁶⁾
- q) *rose-red* ibises.⁽⁸⁷⁾
- r) He felt a wild longing for the unstained purity of his boyhood-his *rose-white* boyhood.⁽⁸⁸⁾

上記引用について考察していくと、空が色あせたバラ色であったり、バラが少女シビルの血の中で踊り、頬に赤い影を落としたり、全生命がバラ色を帯びた喜びに凝集したりす

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」第7号（1987年）

るように様々な Rose の使い方を発見する。その中でも *rose-white boyhood* という語が二回登場するが、この語について調べてみたいと思う。

ヘンリー卿が、初めてドリアンを見た時に感じた素朴な姿と、10年経過した今、ドリアンが過去を振り返りながら、あの少年時代の穢れを知らぬ純真な時代に戻りたいとする激しい渴望を、バラのように白い少年時代という言葉が実に象徴的に表現している。

シェイクスピアが、「おお！五月のバラよ！」という言葉に、オフィーリアに対する情愛を凝縮したように、ワイルドは *rose-white* に純真無垢な姿を映し出すのである。またバラが、5月頃から8月にかけて咲く夏の花であるとすれば、短期間に萎れていくバラの姿がドリアンの少年時代に投影して、もの悲しさを感じさせる。

i) tulip

まず最初に、この作品の中にチューリップが登場するのは、ヘンリー卿の書斎の中である。唯美的ムードが漂うこの部屋の中であって、この新鮮な明彩色の花はロンドンの杏色の日光に輝いて毅然としている。そしてごく限られた上流社会のイメージを想起させる。⁸⁹⁾

One afternoon, a month later, Dorian Gray was reclining in a luxurious arm-chair, in the little library of Lord Henry's house in Mayfair. It was, in its way, a very charming room, with its high-panelled wainscoting of olive-stained oak, its cream-coloured frieze and ceiling of raised plaster-work, and its brickdust felt carpet strewn with silk long-fringed Persian rugs. On a tiny satinwood table stood a statuette by Clodion, and beside it lay a copy of *Les Cent Nouvelles*, bound for Margaret of Valois by Clovis Eve, and powdered with the gilt daisies that Queen had selected for her device. Some large blue china jars and *parrot-tulips* were ranged on the mantelshelf, and through the small leaded panels of the window streamed the apricot-coloured light of a summer day in London. ⁹⁰⁾

次にチューリップは、花壇に咲いている花として作品の中に表われるが、初めに登場した数に比べれば、かなり多いようである。それは真赤に映えて、火の環が震えているようである。

The *tulip-beds* across the road flamed like throbbing rings of fire. A white dust, tremulous cloud of orris-root it seemed, hung in the panting air. The brightly-coloured parasols danced and dipped like monstrous butterflies. ⁹²⁾

A Study of *Flowers* used in *The Picture of Dorian Gray* by Oscar Wilde

シビルは自分の気持ちがうまく弟に通じないことに少しいらだちを覚えている。そしてその気持ちは真赤なチューリップに波及し、まるで派手な明るい色彩のパラソルが踊っているように象徴的に揺れ動く。ワイルドは、シビルの腹立たしい気持ちをチューリップで表現しているように想定できる。そして最後に登場するのは、ドリアンがシビルに罵声をあびせた後、夜の街をさまよっている時に見る光景の中である。

A long line of boys carrying crates of *striped tulips*, and of yellow and red roses, defiled in front of him, threading their way through the huge jade-green piles of vegetables. ⁸³

j) **Violet, poppy**

ドリアンは自殺したシビルのことを聞いて自分が殺したかのごとく、自己を責め苛むが、やがて、それがドリアンにとってはひとつのギリシャ悲劇のように思えてくるのである。一つの記憶を poppy によって忘れようとするドリアンにヘンリー卿は次のように述べる。

‘I must sow *poppies* in my garden,’ sighed Dorian.

‘There is no necessity,’ rejoined his companion. ‘Life has always *poppies* in her hands. Of course, now and then things linger. I once wore nothing but *violets* all through one season, as a form of artistic mourning for a romance that would not die.’ ⁸⁴

紫色に咲き誇るこの高貴なヴァイオレットは、ヘンリー卿にとって、永久に死に耐えることがないロマンスに対する一種の芸術的な喪章であった。

アテネでは、あらゆる花の中でカーネーション (*Carnation, Dianthus caryophyllus*) とヴァイオレットが一番好まれ、結婚式やその他の儀式の時には花冠にして身につけられた⁸⁵。このように、シビルの死がギリシャ悲劇の一部であると感じているドリアンに対して、ワイルドは、ヘンリー卿の言葉を借りて violet を演出するのである。また折しも、シビルの眼の色が、*eyes that were violet wells of passion* というワイルド独特の表現に作者の繊細な心理を読みとることができる。そしてヴァイオレットは次のようにも使われている。

That evening, at eight-thirty, exquisitely dressed and wearing a large button-hole of *Parma violets*, Dorian Gray was ushered into Lady Narborough’s drawing-room by bowing servants. ⁸⁶

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」第7号（1987年）

アランキャンベルに死体の証拠いん滅を頼んだその日の午後8時30分、パルマ産ヴァイオレットの大きな胸飾りをつけたドリアン・グレイは、何もなかったかのようにナルバラ夫人の応接間に入っていく。このパルマ産ヴァイオレットはとても名高く、古代スペインのムーア人の庭に源をもつと信じる学者もあれば、イタリア経由でトルコから入ってきたと考える学者もある⁽⁹⁷⁾。また中世の修道院の庭では、「邪悪な精神に対して効力がある」植物とされていた⁽⁹⁸⁾。ドリアンは、自分の邪悪な精神を葬るべく、大きな、しかも、しとやかさの象徴と見なされてきたパルマ産ヴァイオレットを、もっとも恐るべきことを経験したその後、敢えて使用したものと考えられる。

k) その他の花（アルファベット順）

- a) embroidered with heart-shaped groups of *acanthus-leaves*.⁽⁹⁹⁾
- b) the *apple-blossoms* kept tumbling down on her hair.⁽¹⁰⁰⁾
- c) A white-smocked carter offered him some *cherries*.⁽¹⁰¹⁾
- d) purple stars on the *clematis*.⁽¹⁰²⁾
- e) the stained trumpet of a Tyrian *convolvulus*.⁽¹⁰³⁾
- f) The common *hill-flowers* wither, but they blossom again.⁽¹⁰⁴⁾
- g) I saw her white face at the window, like a stray of *jasmine*.⁽¹⁰⁵⁾
- h) The *laburnum* will be as yellow next June as it is now.⁽¹⁰⁶⁾
- i) honey-coloured blossoms of a *laburnum*.⁽¹⁰⁷⁾
- j) the odour of *lilas blanc*.⁽¹⁰⁸⁾
- k) the hat *lotus-covered Nile*.⁽¹⁰⁹⁾
- l) heavy *lotus-blossoms*.⁽¹¹⁰⁾
- m) tremulous cloud of *orris-foot*.⁽¹¹¹⁾
- n) a little crimson pyramid of seeded *strawberries*.⁽¹¹²⁾
- o) the more delicate perfume of the *pink-flowering thorn*.⁽¹¹³⁾
- p) lovely *water-lilies*.⁽¹¹⁴⁾
- q) the dusty gilt horns of stragging *woodbine*.⁽¹¹⁵⁾

ドリアンが善行を行なおうとしてシビルによく似たヘッテイという少女を好きになる。その純真な乙女の髪の毛にふりかかる *apple-blossom*、そして彼女のジャスミンの小枝のような白い顔。これらが非常に印象的である。肖像画の中の表情が、終焉において点々としたたる真紅の血痕のように鮮烈をきわめる中であって、そのコントラストが実に鮮やかである。息がつまりそうな結末の中であって、ワイルドが差しのべた一服の清涼剤のように想定できる。

A Study of *Flowers* used in *The Picture of Dorian Gray* by Oscar Wilde

本文(Ⅲ)

以上 *The Picture of Dorian Gray* の作中の「花」についての観察をしてきたのであるが、ドリアンの悪行と共にその醜怪の度を深める肖像画は、特に35種類もの花と、その香りによって、人の目を覆わしめるほど醜悪にはいたっていない。もし、花がこの小説の中に全く表われないとしたなら、醜悪の度合いは、増々濃くなり、読むに堪えないほどのものとなっていたであろう。醜悪な小説の中に美しい匂いを漂わせて咲きほこる花は、その香りとともにこの作品を美化し、醜と美とを対照させて一つの芸術作品に高めていると思われる。まさに繊細な芸術家ワイルドの面目躍如たるものがある。彼にとって、花を象徴的に使い芸術効果を上げていくことは、型破りの美を嫌う既成道徳を賛美したビクトリア社会への挑戦であり、35種類もの花の色と、その香りは、灰色の怪物のようなロンドン社会の浄化を狙ったものと推察できよう。全ては、ワイルドの計算の上に成り立っているように思えるのである。

更に、ドリアンが悪の甘美な世界に堕ちていく時、花の香りは、その匂いを強め、この作品に重要な役目を果たしているし、またそれは、醜い魂をカモフラージュし、美しい雰囲気漂わせるための手段でもある。

その他にも花は、この小説の季節感を如実に表わしている。春には春の花が咲き、初夏には、その頃に咲く花が咲いている。ドリアンが、画家バジルを殺害した11月以降、ほとんどの花がその姿を隠す。そして彼が、魂の平和を獲得するために肖像画にナイフを突き刺し自らを死に追いやる場面では、もうすっかり花の香りは消え失せている。色彩的にあるのは、肖像画に被せてあった紫色の覆いのみである。これらは、当然、ワイルドの機知に富んだ演出であろう。

この作品が社会に与えたショックは、はかり知れないものがあった。そして彼は、社会の批判に答えて、この小説の序文で次のように述べている。

Diversity of opinion about a work of art shows that the work is new, complex, and vital. ⁽¹¹⁵⁾

When critics disagree the artist is in accord with himself. ⁽¹¹⁷⁾

We can forgive a man for making a useful thing as long as he does not admire it. The only excuse for making a useless thing is that one admires it intensely. ⁽¹¹⁸⁾

All art is quite useless. ⁽¹¹⁹⁾

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」第7号（1987年）

このようにワイルドは、自分の作品が生命力に溢れ、その作品内に自分の芸術観を注入したと語っているのである。この作品に対する一般の評価は決して良いものではないが、⁽¹²⁰⁾
The Picture of Dorian Gray の中に多種多様な花を使い、醜と美を対比させながら一個の芸術を完成したワイルドの、その手腕は高く評価されねばならない。

〔註〕

- (1) Holland, Vyvyan Complete Works of Oscar Wilde p.207.
- (2) 辻 邦生 「世紀末の美と夢3（イギリス）美神と殉教者」 p.111.
- (3) 加藤憲市 「英米文学植物民俗誌」 p.534.
- (4) 加藤さだ 「英文学植物考」 p.228.
- (5) 加藤憲市 op. cit., p.534.
- (6) Wilde, Oscar The Picture of Dorian Gray, Penguin Books, p.232.
- (7) 辻 邦生 op. cit., p.111.
- (8) 加藤さだ op. cit., p.330.
- (9) 加藤憲市 op. cit., P.490.
- (10) Holland, Vyvyan op. cit., p.751. Lovely Lady of my memory.
- (11) ibid., p.751.
- (12) Holland, Vyvyan op. cit., p.196.
- (13) Wilde, Oscar op. cit., p.7.
- (14) ibid., p.12.
- (15) ibid., p.28.
- (16) ibid., p.28.
- (17) ibid., pp.30~31.
- (18) ibid., p.242.
- (19) ibid., p.20.
- (20) ibid., p.23.
- (21) ibid., p.26.
- (22) ibid., p.28.
- (23) ibid., P.29.
- (24) ibid., p.30.
- (25) ibid., p.33.
- (26) ibid., p.37.
- (27) ibid., p.67.
- (28) 平井 博「オスカーワイルドの生涯」 p.93.
 黄色い本とは、ワイルドが「ドリアン」を創り出すために活用したユスマンスの「ア・レブール」のことだと推定される。
- (29) Wilde, Oscar op. cit., p.239.
- (30) 「ユリイカ詩と批評（9月号）1980」 p.221.
- (31) Wilde, Oscar op. cit., p.87.
- (32) ibid., p.115.
- (33) ibid., p.153.
- (34) 加藤さだ op. cit., p.351.
- (35) ibid., p.352.

A Study of *Flowers* used in The Picture of Dorian Gray by Oscar Wilde

- (36) Wilde, Oscar op. cit., p.93.
- (37) ibid., p.11.
- (38) ibid., p.12.
- (39) ibid., p.13.
- (40) ibid., p.14.
- (41) ibid., p.53.
- (42) 加藤さだ op. cit., p.18.
- (43) Wilde, Oscar op. cit., p.89.
- (44) A・アンダーソン 「花々との出会い」 p.81.
- (45) Wilde Oscar op. cit., p.155.
- (46) ibid., p.156.
- (47) 加藤さだ op. cit., p.23.
- (48) Wilde, Oscar op. cit., p.95.
- (49) ibid., p.101.
- (50) 加藤さだ op. cit., p.88.
- (51) A・アンダーソン op. cit., p.61.
- (52) Wilde, Oscar op. cit., p.140.
- (53) ibid., p.191.
- (54) A・アンダーソン op. cit., pp.61~62.
- (55) Wilde, Oscar op. cit., p.214.
- (56) ibid., p.182.
- (57) ibid., p.155.
- (58) ibid., p.161.
- (59) 近藤米吉 「植物と神話」 pp.233~234.
- (60) Wilde, Oscar op. cit., pp.214~215.
- (61) 安部 薫 「シェイクスピアの花」 p.25.
- (62) ibid., p.33.
- (63) Wilde, Oscar p.7.
- (64) ibid., p.32.
- (65) ibid., p.102.
- (66) ibid., p.107.
- (67) ibid., p.112.
- (68) ibid., p.162.
- (69) ibid., p.232.
- (70) 安部 薫 o.p cit., p.29.
- (71) Wilde, Oscar op. cit., p.26.
- (72) ibid., p.26.
- (73) ibid., p.30.
- (74) ibid., p.44.
- (75) ibid., p.59.
- (76) ibid., p.67.
- (77) ibid., p.69.
- (78) ibid., p.70.
- (79) ibid., p.87.

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」第7号(1987年)

- (80) *ibid.*, p. 87.
 (81) *ibid.*, p. 94.
 (82) *ibid.*, p. 105.
 (83) *ibid.*, p. 134.
 (84) *ibid.*, p. 152.
 (85) *ibid.*, p. 159.
 (86) *ibid.*, p. 182.
 (87) *ibid.*, p. 183.
 (88) *ibid.*, p. 243.
 (89) 安部 薫 *op. cit.*, p. 28.
 (90) *ibid.*, p. 9.
 (91) Wilde, Oscar *op. cit.*, p. 53.
 (92) *ibid.*, p. 79.
 (93) *ibid.*, p. 102.
 (94) *ibid.*, p. 115.
 (95) 安部 薫 *op. cit.*, p. 48.
 (96) Wilde, Oscar *op. cit.*, p. 194.
 (97) 安部 薫 *op. cit.*, p. 49.
 (98) *ibid.*, p. 48.
 (99) Wilde, Oscar *op. cit.*, p. 155.
 (100) *ibid.*, p. 233.
 (101) *ibid.*, p. 101.
 (102) *ibid.*, p. 30.
 (103) *ibid.*, p. 31.
 (104) *ibid.*, p. 30.
 (105) *ibid.*, p. 234.
 (106) *ibid.*, p. 30.
 (107) *ibid.*, p. 7.
 (108) *ibid.*, p. 240.
 (109) *ibid.*, p. 183.
 (110) *ibid.*, p. 128.
 (111) *ibid.*, p. 79.
 (112) *ibid.*, p. 232.
 (113) *ibid.*, p. 7.
 (114) *ibid.*, p. 233.
 (115) *ibid.*, p. 7.
 (116) *ibid.*, p. 6.
 (117) *ibid.*, p. 6.
 (118) *ibid.*, p. 6.
 (119) *ibid.*, p. 6.
 (120) 平井 博 「オスカーワイルドの生涯」 p. 93.

平井 博氏は、当時のビクトリアンが次のような眼で、この作品を批判したと述べている。

「功利主義を奉ずる者は、その放蕩を非難し、ピューリタンは、その悪業に嘔吐を催した。ドリ
 アンと画家の間にかもし出されている男性同志の愛着に潜む、インモラルな分子に人々はぞっと

A Study of *Flowers* used in *The Picture of Dorian Gray* by Oscar Wilde

なった。口をついて出るヘンリー・ウオットン卿の警句とその快樂主義に、読者は耳をおおいたくなったのである。」

〔参 考 文 献〕

- Davis, Rovert Hart—*Selected Letters of Oscar Wilde*, LoWe & Brydone Printers Limited, Thetford, Norfolk, 1979.
- Ellmaun, Richard—*The Artist as Critic ; Critical Writings of Oscar Wilde*, The University of Chicago Press, 1969.
- Holland, Vyvyan—*Complete Works of Oscar Wilde*, Collins Clear-Type Press, 1981.
- Miller, Revert-Keith—*Oscar Wilde*, Frederick Ungar Publishing Co., Inc, 1982.
- Sherard, Rovert Harborough—*Bernard Shaw · Frank Havis & Oscar Wilde*, Haskell House Publishers Ltd, 1974.
- Sherard, Rovert Harborough—*The Real Oscar Wilde*, T. Werner Laurie Ltd.
- Wilde, Oscar—*The Picture of Dorian Gray*, Penguin Books, 1976.
- A・アンダーソン著・竹田雅子訳 「花々との出会い」(八坂書房, 1979)。
- 安部 薫著 「シェイクスピアの花」(八坂書房, 1979)。
- 石川林四郎著 「英文学に現はれたる花の研究」(八坂書房, 1980)。
- 海野 弘著 「魅惑の世紀末」(美術公論, 1986)。
- 加藤憲市著 「英米文学植物民俗誌」(富山房, 1976)。
- 加藤さだ著 「英文学植物考」(名古屋大学出版会, 1985)。
- 河村錠一郎著 「世紀末の美学」(研究社, 1986)。
- 河村錠一郎著 「ビアズリーと世紀末」(青土社, 1983)。
- 近藤米吉編著 「植物と神話(花と木とロマンの詩)」(雪草社, 1979)。
- 辻 邦生責任編集 「世紀末の美と夢3(イギリス)美神と殉教者」(集英社, 1986)。
- 長島伸一著 「世紀末までの大英帝国」(法政大学出版局, 1987)。
- 西村孝次著 「オスカーワイルド全集I」(青土社, 1980)。
- 平井 博著 「オスカー・ワイルド考」(松伯社, 1980)。
- 平井 博著 「オスカー・ワイルドの生涯」(松伯社, 1979)。
- 堀江珠喜著 「サロメと世紀末都市」(大阪教育図書, 1984)。
- 山田 勝著 「世紀末とダンディズム」(創元社, 1981)。
- 「ユリイカ(9月号)」(青土社, 1980)。